

人が再生する現場に関われるのは喜びです

ホームレス問題を考える 6

“派遣切り、失業、解雇…。仕事と住まい、そして人の絆を失った人々を支援したい!” 「抱樸館福岡」の開設を広く社会に向けてアピール!!



青木康二さんの名刺には4つの肩書が記されている。筆頭は「NPO法人北九州ホームレス支援機構施設事業部長」。2番目が現在奔走中の「抱樸館福岡」準備室長だ。来春稼働予定の「抱樸館福岡」は80部屋を有する大規模な自立支援施設。九州で最もホームレス者が多いと言われている福岡市での支援に、それをどのように生かしていくのか、責任者として青木さんに課せられた使命、そして寄せられる期待は大きい。今号では準備に明け暮れる青木さんを紹介する。

「抱樸館福岡」準備室長

青木 康二 さん

故郷

郷は学齢期を過ぎ、今も両親が暮らす山口県光市だ。1972年生まれの37歳。まっすぐに伸びた若木の印象がある。「なぜホームレス支援をはじめたのか」。そう問われるたびに彼は来歴を次のように語ってきた。

地元の高専から早稲田大学に進み、卒業後は一旦一般企業に就職。しかし、どうしてもそれが生涯の職業とは思えず、2年半で離職。特別養護老人ホームでアルバイトをはじめた。その時たまたま統合失調症の患者家族と知りあい、何とか彼らの力になりたいと精神保健福祉士の資格をとる。やがて精神科の病院の相談員となり、そこで20年間入院していたある患者さんの相談にのるうち、彼がアパートを借りて暮らしたいと望んでいることを知る。そのため保証人を探さず、ホームレス支

援の一環として保証人バンクを立ち上げていた奥田知志さんと知りあい、北九州ホームレス支援機構と出会う。

ある日、公園での炊き出しに参加すると200人を超えるホームレス者が並んでいた。同じ地域にいながら、そうした現実があっても無関心だったと気付く。しばらくしてホームレス自立支援センターを開設するという話があり、スタッフに誘われた。精神科での相談員としての仕事は道半ばであったが、同じような志を持ち精神科で働く人は少なくなかった。一方、ホームレス支援に「仕事」として関わる人は、ほとんどいない。「やってみようか」と思った。

「最初から人助けをしようというのではなく、何となくこうなってしまうのです。より福祉的なものへ、より根源的なものへ吸い寄せられる

人間として向きあう

青木さんを福祉へ向かわせた要素はまだある。「バイオエシックス(生命倫理)」を大学のゼミでとった。バイオエシックスとは、アメリカの公民権運動、市民運動などを背景に発展してきた学問。人間の生命のはじまりをめぐる遺伝子操作の問題、生命の終末をめぐる終末期医療の問題など、課題は多岐に渡る。青木さん

は中でもホスピスを研究した。今こそインフォームドコンセントは当たり前だが、当時はがんを本人に告知するかどうかで世論は割れていた。ホスピスという言葉も正確に理解されたことはなかった。だが、新分野の学問は面白くはまり込んだ。

「パターナリズム(父親的温情主義)」という概念も知った。未熟な子どものために父親が進路を決めてやるということに興味する。患者に代わって医師が決定することもパターナリズム、インフォームドコンセントとは対極にある。同様に、普通の社会生活を送りたいと望んでいる統合失調症の患者の意を汲み取らず、病院にいる方が本人のためだと決めてかかるのもパターナリズム。精神科の病院で相談員をしていた時、青木さんがこだわったのはその点だった。青木さん自身にも似た経験があった。高校2年のとき父親ががんになった。患者である父、母、兄は知っていたが、

ように彼の感性は向かってしまっ、それは確かなことだった。

増して自分だけ子ども扱いされたようでひどく悲しかった。今にして思えば、それがバイオエシックスを学ぶきっかけとなり、「家族(ホーム)」を考へることへとつながっているのかもしれない。

人が再生する現場に関わる喜び

2003年にホームレス支援に携わるようになって、これまで1000人は下らないホームレス者と出会ってきた。膨大な数のホームレス者に対して支援する側の体力は依然小さい。一人ひとりに寄り添うというよりは「はい、次の人」というような関わりにならざるを得ない時がある。

また、過酷な環境に身を置くホームレス者は早く亡くなる傾向にあり、1カ月に何人も亡くなることもある。支援機構は「一人ひとりの人生の最後まで関わる」ことを使命としている。お葬式もそのたびに執り行われる。「それでも」青木さんは言う。「人が再生する現場に関われるというのは喜びなのです」。

青木さんにだけは別の病名が告げられ、手術後、本当のことが知らされた。病名にも衝撃を受けたが、それにも増して自分だけ子ども扱いされたようでひどく悲しかった。今にして思えば、それがバイオエシックスを学ぶきっかけとなり、「家族(ホーム)」を考へることへとつながっているのかもしれない。

「ホームレス者に対する社会的風当たりは強い。子どもたちによるホームレス襲撃事件も後を絶たない。未曾有の経済危機の中で、ホームレス者の人権など「自己責任」の論調にかき消される。支援機構には「なまじ支援するからホームレスが増える」といった容赦のない意見が届けられる。「ホームレス者は知的障がいを持っていたり、認知症、うつ、アルコール依存症などの精神疾患を抱えていたりすることが多いのです。また社会的・経済的な状況の影響も大きい。そうした事実を知ってほしい。仮に、ホームレスになったのが自己責任であったとしても、路上で息を引き取るといふ現実をそのままにしておくという社会でよいものでしょうか? 『ホームレスを好きでしているのでは?』とよく誤解されるが、これまで『野宿が楽しい』と言ったホームレス者に出会ったことはありません」。

現在64歳の男性の話。高架下で10年間ホームレスをしていた。「オレは独りもんやけん」が口癖だった。同様に救済されアパートに入居。最近携帯電話が欲しいと言ってきた。「いつでも青木さんに電話できるけんね」がその理由だった。生きることに何の望みも持たなかったホームレス者が、人の言葉の温かさに反応してわずかに身を起し、やがてそれを支えに立ち上がる。そして路上にいる仲間を助ける側に回ったりさえする。そのような人の再生の現場に関われることが何よりの喜びだ。